

# 形容詞化接尾辞

——ハシ・マシについて——

本稿は、シク活用形容詞を派生した「ハシ」「マシ」という接尾辞について、その成立と性格を中心に考察しようとするものである。

—

まず、平安時代の和文語の資料として、『源氏物語大成 索引篇』を利用して、シク活用形容詞のシを除いた部分（以下「語幹①」<sup>①</sup>と呼ぶ）の末尾の音節別にその異なり語数を見ると表1のようになる。<sup>②</sup>

表1

ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	合計
	3	3	19		25	6	4	2		2	2	16	1	ア
			1	3	1	1								イ
	2						1	1	1			2		ウ
	1		2								1	1		エ
1	1		2	1	3	1	1	2		1				オ
1	7	3	24	4	28	8	6	5	1	3	3	19	1	合計

（語幹②の末尾音節別異なり語数）

（源氏物語大成）

村田 菜穂子

ここで注意されるのは、語幹②の末尾音節がハ・マ・カの語が他の末尾音節の語に比べてかなりの数を占める点である。さらに言えば、複合形容詞および接頭語が上接している形容詞を除いたシク活用形容詞(一一三語)のうち、一ハシ・一マシ・一カシという語尾をとる語(六〇語)は過半数を占めていることが指摘できる。

そこで、一ハシ・一マシ・一カシ語尾をとるシク活用形容詞に注目し、それぞれの語について見てゆくことにする。

さて、この一ハシ・一マシ・一カシ語尾をとるシク活用形容詞は、それらの接尾辞に注目すると三つに大別できる。

I 接尾辞一シが接尾したもの

II 接尾辞一ハシ・一マシが接尾したもの

III 接尾辞一ガハシ・一ガマシの接尾したもの

この一ハシ・一マシ・一カシ語尾をとるシク活用形容詞のうち、大部分がIの語であり、Iに属する語は、(A)ケハシ・サカシなど(語幹②が語基的なもの)、(B)ニホハシ・イドマシ・ナゲカシなど(語幹②が動詞の被覆形であるもの)、(C)イタハシ・カシマシ・イフカシなど(語幹②が語基+接尾辞の形式をとるもの)のグループにさらに細かく分けることが可能かと思われる。また、IIに属する語として、ソシラハシ・オソマシな

ど、IIIに属する語として、ミテリガハシ・カシガマシなどが挙げられる。

では、I II IIIに属する語の使用状況を、『時代別国語大辞典 上代編』の見出し語と『源氏物語大成 索引篇』の語とを対比して調べてみる。すると、表2のごとくになる。(4)(5)

表2

計	III	II	I			計
			(C)	(B)	(A)	
12	1		1	7	3	一ハシ
26	2	6	1	15	2	一マシ
10			1	8	1	一カシ
33	15	3		15		計
8			2	4	2	上代
25			3	19	3	中古
30	1		4	19	6	上代
84	16	9	4	49	5	中古
	○	○	△	◎	△	増減

△……上代・中古にかけての語例の増加および減少

◎……語例が同数もしくは増加・減少したものはごくわずかの数

○……語例がある程度の数増加したもの

◎……語例がかなりの数増加したもの

……上代とは「時代別国語大辞典 上代編」の見出し語に拠った。

……中古とは「源氏物語大成 索引篇」に拠った。

さて、表2によって、一般に最も基本的な語基による構成であるI(A)、そしてI(C)は、上代・中古にかけて語例は横ばいで

あつて、その生産力が前時代的なものであつたことがうかがえるのであるが、ここで特に注意されることは、中古になつて、

新しくシク活用形容詞を派生する接尾辞Ⅱ（ゝハシ・ゝマシ）が見られるようになったこと、そして、動詞の被覆形から派生されるシク活用形容詞Ⅰ(B)がかなりの数増加したことである。

以下、この中古に新しく現われた接尾辞ゝハシ・ゝマシがいかなる事情をもつて成立し、どのような性格のものであつたのかについて考えることにしたい。その中で、動詞から派生されたⅠ(B)の語がかなりの数増加してくるという事情がどのような連関をもつのかについても触れることになろう。また、接尾辞Ⅲ（ゝガハシ・ゝガマシ）が中古にある程度の語例を有するようになるが、このことと接尾辞Ⅱ（ゝハシ・ゝマシ）が現われることとは連関する事情をもつと思われるが、その点については改めて触れる機会をもちたい。

ところで、接尾辞ゝハシ・ゝマシについて詳しく見てゆく前に、このゝハシ・ゝマシが結合した一形態素であつて、ゝハシ・ゝマシという接合した形式が語基に下接しているⅠ(C)の語とは區別されることについてまず触れておきたい。

二

ではまず、Ⅰ(C)の語の例を挙げる。

イタハシ（万八八六）

：己が身し伊多波斯計礼ば玉梓の道の隈回くまわに草手折り柴取り敷きて床じもの打臥うちふい伏して思ひつ、歎き伏せらく

：

カシマシ（落窪物語）

あなかしまし。今は取り返かへすべき事にもあらず。あいなし。ないひそ。

イフカシ（万三二〇六）

相見まく欲しみしすれば君よりも吾そまさりて伊布可思美為み也

ハツカシ（万四一〇八）

里人の見る目波豆可之佐夫流児にさどはす君が宮出しりぶり

ムツカシ（落窪物語）

せばくて、幼わかき物ともいとくむつかしう侍れば、今これら留めてまゐりて来ん

右のように、I(C)に属する語は上代・中古(中でも平安中期以前)に例が見られるものばかりであり、IIの語と異なる点がありませんとつここにみる。この点についてはIIの例を見た後で再び触れることにする。

さて、右に見たイタハシ・イフカシ・ハツカシについて、山口佳紀氏は「古代日本語文法の成立の研究」の「第二節 形容詞語幹部の成立」の中で、「語幹部が、(語基+接尾+シ)(シク活用)の形をなすもの」の例として取り挙げられており、

イタハシ(勞)は、動詞イタハル(勞)の形容詞形であり、(中略)イタハシのイタはイタ(痛)、ハは情態言を作る接尾辞であろう。

とされ、イフカシ、ハツカシについても、

イフカシ(不審)は、イフカル(訝)の形容詞形であるが、イフはイフセシ(訝)のイフ、オホ(オホ)ロカ(オホ)ホ(オホ)と同源であろう。カは情態言を作る接尾辞である。

ハツカシ(恥)は、動詞ハツ(恥)を情態言化するため、カの接したものである。

と述べておられる。山口氏が関係付けておられるイタハル(伊勢物語)・イフカル(万七五三)・ハツ(東大寺諷誦文稿)は、

I(C)の語同様平安中期以前に例の見られるもので、山口氏の論述が肯定できる。

ムツカシについては、ムツカル(敏達紀 前田本)と関係付け得るもので、断言する根拠に欠けるが、イタハシ・イフカシ同様にムツカはムツとカとに分析できるものかと思われる。ひとまず、イタハシ・イフカシに準じておく。また、中世に入つてムツク(下二段)の語形が現われるが、時代的に見てムツカルから二次的に形成されたものと見るのが良からう。

次に、カシマシは、カシガマシ(鷺)の「カシ」と同根と考えられる語で、意味的にも通じる。

カシマシの例は上代には見当らないが、万葉集に「カシマ」という語がある。

葭かき葦あしり可志麻かしかの神を折りつ、皇御軍すめみくに吾は来にしと

(万四三七〇)

「カシマ」は地名で、「葭葦り」がこの「カシマ」の枕詞(万一一七四も)として用いられている。「萬葉集注釋」一一七四の訓釈を見ると、「葭葦り」枕詞。葭が葦あしってその音のやまましい、といふ意で「鹿島」にかけた。」とある。また、佐竹昭広氏は、「所聞多」を地名「香島」に当てカシマと訓んでいる(万三八八〇)ことから、「所聞」もカシマの義訓とされ、

「鳥音之所聞」(万三三三六)を「鳥の声がかしましい」意で、同音のカシマの枕詞として処理しうる」と説かれている。以上のように、うるさい・やかましいという意味のカシマという語が上代には存在したものと考えられ、このカシマの「マ」は阪倉篤義氏の言われる情態言を構成する接尾辞と考えて良いだろうと思われる。また、この「マ」が場所を示す語に多く見られることと、うるさい意のカシマが地名と掛詞になっていることも関係付け得るのではないだろうか。

ところで、「時代別国語大辞典 上代編」にイスカシという語が挙げられている。「岩波古語辞典」ではイスカ(鴟)と関係付けているようであるが、語構成がよくわからない。よって、本稿ではひとまず措いておくことにする。

以上のことをまとめると、I(C)の語は、平安中期以前にその例が確認できるものであり、その語幹②は「語基+接尾辞」という構成であったと考えられる。

### 三

次に、IIの例を挙げることにしたいが、IIの語の中には、イカシ語尾の語は見られないので、IIはイハシ・イマシ語尾を

とる語に限られる。以下において便宜上、イハシ語尾をとるものを(I)、イマシ語尾をとるものを(II)と分けることにする。では、II(I)の例を挙げる。

ニツカハシ(土左日記)

このをりに、ある人々をりふしにつけて、からうたども、ときにつかはしきいふ。

ヨツカハシ(源氏物語 夕霧)

「けだかう、もてなし聞えむ」と、おほいたるに、世づかはしう、軽しくしき御名の立ち給ふべきを、おろかならず、思し嘆かる。

イタツカハシ(興福寺滅大慈恩寺三藏法師伝 承德三年点 築島裕氏釈文)

心痛ミ、背悶シク骨酸ルニ、肉楚シ、  
ナマメカハシ(浜松中納言物語)

たをたをとやはらかに、なまめかはしきもてなしなど、  
さまざまめでたしと見えつる御有様どもにも劣らず、

イソガハシ(興福寺滅大慈恩寺三藏法師伝 永久四年点 築島氏釈文)

軍事忙カハシク迫ム、法師至(レリ)ト聞(キ)テ  
〔令〕引キ(テ)斯(ニ)入(ラシメ)テ 覽(ク)相

(七) 見テ「而」清言(スル)コト既ニ交(リ)テ遂ニ  
日ノ興クコトヲ知(ラ)不、

ツアラハシ(蜻蛉日記)

かやうに胸つぶらはしき折のみあるが、よに心ゆるびな  
きなんわびしかりける。

アナツラハシ(枕草子)

生ひさきなく、まめやかに、えせざいはひなど見てゐた  
らむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、

ソシラハシ(源氏物語 少女)

もとよりすぐれざりける御かたちの、や、さだ過(ぎ)  
たる心地して、やせくに、御髪すくなゝるなどが、か  
くそしらはしきなりけり。

マギラハシ(源氏物語 橋姫)

世(の)中を、背き顔ならむも、はゝかるべきにあらね  
ど、おのづから、うちたゆみ、紛らはしくてなむ、過ぐ  
しくるぞ。

オゴラハシ(夜の寝覚)

「……うき世をしりはじめれば、かぎりなき事ともいへ  
ど、そのなかをわけて、我かたさまの心よせは、いとあ  
はれなりしか」と思ふに、わが身おごらはしく、うれし

く、いみじくおほゆる事のかぎりなきに、

ハバカラハシ(浜松中納言物語)

世を隔てたるとはいひながら、かたじけなき御かげども  
の、御おもておせにてもあるべきかなと、憚らはしう思  
せど、

右に見たように、II(イ)の語は、平安中期以降に例が見られる  
もので、先程取り挙げたI(C)の語が平安中期以前に出揃ってい  
ることとは時代的なずれを見せる。

ところで、II(イ)の語には対応する動詞が存在する。

ニツク(万七七一)・ヨツク(源氏物語)・イタツク(伊勢物  
語)・ナマメク(伊勢物語)・イソグ(後撰集)・ツアル(竹取  
物語)・アナツル(石山寺遺法華経玄賛 平安中期中点 中田祝夫  
氏釈文)・ソシル(西大寺遺金光明最勝王経 平安初期点 春日  
政治氏釈文)・マギル(竹取物語)・オゴル(新撰字鏡)・ハバ  
カル(万三二七)

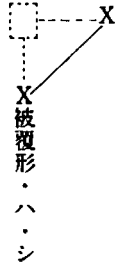
右の動詞を見たとき、次のような点に気付く。すなわち、こ  
のII(イ)の語およびI(B)の語はともに対応する動詞の被覆形を、  
みずからの内に有してはいるのであるが、I(B)の語とII(イ)の語  
との大きな違いは、I(B)の語の場合、その語幹②が対応する動  
詞の被覆形そのものであるのに対して、II(イ)の語の場合は、そ

の語幹②が対応する動詞の被覆形そのものではなく、常に対応する動詞の被覆形とシク活用形容詞を派生する接尾辞シとの間に「ハ」という音形態を介在させているという点である。

仮りに、I(B)・II(I)の語とそれぞれ対応する動詞をXとする

I(B)の語 X—X被覆形・シ

II(I)の語



(点線は顕在化していないことを示す。)

右のようになり、II(I)の語には語幹②とそのまま対応する動詞形がない(顕在化していない)という点がI(B)の語と大きく異なるのである。

また、II(I)の語とI(C)の語とは時代差による生産力の違いが見出せるようである(表2)。つまり、I(C)の語例が上代中古ではカシマシとムツカシが入れ替っただけで変化はなく、固定的で、その生産力が前時代的であったと見られるのに対し、II(I)の語は中古にその生産力を奮ったと見られるのである。ただし、表2では資料を限定したため、中古ではI(C)の語の生産力が前時代的なものであるというような調査結果となつたとも

解釈し得るかと思われるが、山口氏の前掲書・同節<sup>⑩</sup>でもI(C)と同様の構造をなす語として本稿で取り挙げた以外は、「アタラシ(惜)・イトホシ(労)・ウ(またはオ)ムガシ(喜)・メツラシ(愛)」の四語を挙げておられるだけで、山口氏が言われるように、イトホシとイタハシとが「母音交替の関係にあるもの」とすれば、さらに一語除かれることになる。そして、このアタラシ(惜)・ウ(またはオ)ムガシ(喜)・メツラシ(愛)はいずれも上代に例のあるものばかりで、I(C)の語同様、前時代的なものであり、盛んな生産力を失っていたであろうという見方を否定するものではない。

要するに、上代においては、シク活用形容詞を派生するのが接尾辞シ唯一と言って過言でないほど限られていたため、シク活用形容詞の派生は、結局、語幹②の部分の派生にゆだねられていたのであり、「語基+接尾辞」(I(C))という形式のように、情態言を派生する接尾辞によって語幹②を派生することもその一つの形式であったかと思われる。しかし、中古になつて、シク活用形容詞の派生が接尾辞シにのみゆだねられるのではなく、IIのハシ・イマシ、IIIのイガハシ・イガマシというような接尾辞によつてシク活用形容詞の派生が盛んに行われるようになったと思われる。

以上をまとめると、I(○)の語は語基に「ハシ」という接合形式が接尾した、言いかえると、語幹②に最も基本的な接尾辞「シ」が接尾したものであったのに対し、II(イ)の語は語基に「ハシ」という結合した形式の接尾辞が接尾したものと捉えられよう。

この「ハシ」という接尾辞について、飯倉氏は「語構成の研究」の「接尾語とその派生語」<sup>⑬</sup>の項で、

シ②は、ハシといふ肥大形をとつて、(中略)動作・作用を意味する外形的情態性の語基からも、情態的な情態を意味する語を派生することが可能であった。

とし、その例として、「イタツカハシ・ケガラハシ」を挙げ、

接尾語シの肥大形とすべきものには、みぎのごときシ②の肥大形はほとんどなくて、おほくはシ①の肥大せるものである。

と説かれている。

では、この肥大形「ハシ」はどのようにして成立したのであるうか。

先の第一節で触れたように、「ハシ」語尾をとる語群の中で、上代・中古にかけて、I(B)の形式(語幹②が動詞の被覆形であ

る)のものが二倍強となっている。すなわち、フを語尾にとる動詞の被覆形にシク活用化接尾辞「シ」の接尾した $\square$ ハシの形をなす語が上代・中古にかけてかなり造語されたのである。

このように、「ハシ」を語末にとるシク活用形容詞がある程度の数にのぼると、「ハシ」は、「ハ」+「シ」という単位ではなく、「ハシ」という肥大した一形態素として意識されるようになり発展したのではないかと思われる。

飯倉氏は、このような「膠着肥大した接尾語の、もつとも適切な例」として、「かす」を挙げられ<sup>⑭</sup>

接尾語「す」が、結合中においてこの「か」と、しばしば出あふために、つひになんびとかによつて、たとへば「トドロトカス」のごとき異分析がほどこされ、その結果、接尾語「す」は、語基の要素の一部をとりこんで肥大した形となり、その意味や生産力にも変化をきたすにいたつたと考へられる。

と述べておられる。「かす」は動詞を派生する肥大形接尾辞であつて、「ハシ」が形容詞を派生するそれである故、全く同一線上には捉え得るものではないかもしれないが、ともに用言を派生する接尾辞という点において、膠着肥大する過程は「かす」と原理的に通じるものであらうと思われる。



また、このような「かす」について、吉田金彦氏は「口語的表現の語彙「①かす」」の中で、

いまかりに、本来ク語尾動詞に「す」の附いた「①かす」を本来型、いはゆる類推作用で起つたと見られてゐる「①かす」を応用型と、あまり用語は適切でないけれども便宜上仮称することにす。

と述べておられる。今、これに従うとすると、I(B)は「本来型」、II(A)は「応用型」に分類されることになる。繰り返すことになるが、「本来型」①ハシとは、フを語尾にとる動詞に形容詞化接尾辞①シの接尾した「①ハ」+「①シ」という形式であり、「応用型」①ハシとは、「本来型」からの「類推作用」、言いかえると、前項部の要素の一部を取り込んだ「本来型」と同じ音形態であるところの肥大した接尾辞「①ハシ」という結合形式であつて、明らかにI(B)に対してII(A)は二次的なものであると言ふことができよう。

ただし、肥大形①ハシの接尾した例として、阪倉氏が挙げられた「ケガラハシ」については、ケガル(東大寺諷誦文稿)と関係付け、「ケガラハシ」と捉えるよりも、ケガラフの語形が存在することから、I(B)の語と考へ、「ケガラハシ」と捉える方がよろしいかと思われる。

ケガラフ

・けがらひたれば、例の作法なし。中納言おりて拝し給ひ、御返し奏せさせ給ひつ。(宇津保物語 藏開上)  
・弱くなり給ひし時、齋むことうけ給ひし日、ある大徳の袈裟をひきかけたりしまゝに、やがて襦ひにしかば、物の中より今ぞみつけたる。(蜻蛉日記)

#### 四

次に、語末に①マシをとるII(B)の例を挙げる。

ツベタマシ(蜻蛉日記)

さてありふるほどに、京のこれかれのもとより文どもあり。みれば、「今日、殿おはしますべきやうになんきく。今度さへおりずは、いとつべたましきさまになん世人も思はん。……」

オゾマシ(源氏物語 帚木)

ことさらに、情ななくつれなきさまをみせて、例の腹だち怨ずるに、「かく、おぞましくは、いみじき契り、深くとも、絶えて又、見じ。……」

アラマシ(源氏物語 若紫)

乳母は、「後めたう、わりなし」と思へど、あらましよう聞え騒ぐべき程ならねば、うち嘆きつ、居たり。

右のごとく、II(向)の語は(イ)の語と同じく、平安中期以降の例であつて、I(C)の語とは時代的なずれを見せている。

そして、次に気付くことは、II(イ)の語が動詞との対応をもつのに対し、(向)の語は形容詞との対応をもつ点である。

すなわち、ツベタマシ——ツメタシ(落窪物語)・オゾマシ——オゾシ(源氏物語)・アラマシ——アラシ(万三六八八)というように、II(向)の語はク活用形容詞の語幹に「マシ」が接尾したものと考えられる。

ところで、個別的な問題であるが、「アラクマシ」という語がある。この語は三巻本枕草子にのみある孤例で、他の伝本ではこの箇所に見られる。

アラクマシ

御獄に詣でて帰りたる人などのもて来める、枝さしなどは、いと手触れにくげにあらくましけれど、なにの心ありて、あすはひの木とつけむ。

同箇所は、能因本・前田家本では「アラアラシ」、堺本では「アラマシ」となっている。そして、この部分は三巻本第一類本の欠失部であり、第二類本によって補われた箇所である故、

ひとまず除いておいた方が良いかと思われる。

さて、再び表2を見ると、第三節で指摘したごとく、I(B)の語末に「ハシをとる語同様、上代「中古にかけて、I(B)の語末に「マシをとる語もほぼ二倍の数となり、語尾にムをとる動詞の被置形にシク活用化接尾辞「シ」が接尾した構造をなす語も多数造語されている。ここでも、「ハシと同じく、上代「中古にかけて、マシという接合が語末に多く認められるようになると、「マシ」+「シ」という単位から、「マシ」という結合した単位として理解されるようになり、肥大化した接尾辞「マシ」が成立したのであろう。

しかるに、この「マシ」は吉田氏(前掲論文)の「応用型」に当たると見られ、I(B)の「マシ」に対して二次的なものであるということは全く接尾辞「ハシ」の場合と同じと考えて良いだろう。

## 五

以上のようにして、肥大化した接尾辞「ハシ」・「マシ」が成立するに至ったのであろうと思われる。

ところで、肥大形「ハシ」・「マシ」が成立したのは、「ハシ

シ・マナシという接合が多く認められるようになったからであらうと考えてきたのであるが、それではなぜ、語尾にフ・ムをとる動詞が他の動詞よりも多く形容詞との対応をもつようになったのか、言いかえると、語尾にフ・ムをとる動詞が他の語尾の動詞よりも多く形容詞化したのであろうか。この点について考えてみることにしたい。

フは、一般的に上代では、反復・継続を表す助動詞と言われ、後にこの助動詞は接尾辞化したと言われている。助動詞あるいは接尾辞のいずれと捉えるかという問題は別にして、いずれにしても、反復・継続の意を表すと捉えることに問題はなからう。ところで、動詞・形容詞の本質的な意味について、森重敏氏は「日本文法通論」<sup>①</sup>の中で、

なお、動詞は、右の自動詞・他動詞の二大別においてもわかるように、実詞としての意味が本質的に時間的であり、過程的である。過程を捨象して含まぬものも、過程を含むものとの対立においてある限りで過程的・時間的であるといえる。これに対して形容詞は、その主観的情意・客観の状態の二大別を通じて、本質的に同じく時間的であるが、過程的ではなく、状態として「持続」的であるといえる。とされ、さらに、

持続は、わかりやすくは、動詞の時間的に対して空間的といふこともできるであらうが、厳密には同じ一つの時間の中に二つのありかたであるから、さきのおのずからのありわざにおけるように、動詞的な形態において状態をあらわすものも、二つの間には連続的に存することになる。と説かれている。

このフの反復・継続という意は、まさに「時間的」であると同時に「持続」的、あるいは連続的なものであり、語尾にフをとる動詞が多く形容詞との対応をもつのは、右のような本質の連関に基づくものだからではなからうか。

次に、ムは、フのように反復・継続の意を表すというようなはっきりした定義のなされていない接尾辞であつて捉えにくいものである。そして、ムは、ミ語法と関係付け得るか否かは置くとしても、「形容詞語幹+ム」の型で動詞を派生したりする。このような機能を備えたムは、他のク・ス・ルなどの動詞語尾よりも、形容詞との連関を色濃く有していたことから、動詞→形容詞(例 イサム→イサマシ)、形容詞の語幹→動詞(例 ヲシ→ヲシム)、あるいは形容詞の語幹→動詞→形容詞(例 ウト→ウトム→ウトマシ)のように互いに行き来することが多く行われたのではないだろうか。

くだくだしく述べてきたが、以上のことから結論として、  
「ハシ・「マシ」とでは上接する語基に違いがあることが指摘で  
きた。

動詞の被覆形「ハシ」

「ハシ」  
「マシ」  
ク活用形容詞の語幹「ハシ」

右のように、「ハシ・「マシ」に上接する語基は整然と分かれ  
る。

シク活用形容詞を派生する「シ」が、上接する語幹②に数種の  
バリエーションをもつのに対して、肥大形「ハシ・「マシ」が決  
まった語基についてしか接尾しないのは、その肥大化した部分  
の「ハ」「マ」という要素の性質に由来するものではないだろ  
うか。

つまり、この「ハ」「マ」が動詞を派生する一拍の接尾辞  
「フ」「ム」の被覆形だとすると、「フ」「ム」本来の性質が反  
映され、上接し得る語基に何らかの特徴を見せるということは  
当然予想できる。

飯倉氏<sup>③</sup>によると、「フ」は動詞語基に多数接尾し、「ム」は形  
容詞の語幹に多数接尾する語尾であると説かれており、まさに、  
この「ハシ・「マシ」は「フ」「ム」と同様の語基に接する接尾

辞であって、動詞語尾「フ」「ム」の性質をそのまま踏襲した  
ものであることがうかがえる。以上のことから、第三・四節  
で触れたごとく、目的「ハシ・「マシ」は、「フ」「ム」という  
動詞語尾を取り込んだ肥大形であることが逆説的に裏付けられ  
よう。

注① ク活用形容詞のシを除いた部分、いわゆる語幹と区別する  
ために、シク活用形容詞のシを除いた部分を語幹②と呼んで  
おく。

② ただし、複合形容詞の扱いについては、重複形は除き、オ  
クユカシなどはユカシという単純形で一語と数える。また、  
接頭語の付いたケナツカシなどはケとナツカシに分けること  
ができるとみなしナツカシという単純形で一語と数える。

③ 「アルベカシ」という語形が見える。この語は「アルベシ  
(アル+ベシ)」と対応する語であろうと見られ、I(B)の語  
の中に語幹②が助動詞(ベシ)の被覆形であるものが一語だ  
け含まれている。

④ 従来、度々取り挙げられてきた如く、中古の和文語の資料  
として「源氏物語」を選んだのであるが、上代にはこれと対  
比させ得べき和文語の資料もなく、また、量的にまとまった  
異なり語数を必要とする為、問題点を幾らか含むことを承知  
しながら、上代語の資料として「時代別国語大辞典 上代  
編」を取ることにした。確かに、「時代別国語大辞典 上代

網」が辞書であるという性質を考えれば、対比させる中古の資料として、「源氏物語」一作品では不十分であることは否めない事実であるが、中古の形容詞全般を一時に扱うことは膨大で手に余る作業であり、また、「源氏物語」から得た傾向と、中古の他の作品を含めたものから得た傾向とは、本質的に矛盾するものではないと判断し、今は右の二文献を対比することにとどめさせていただく。

⑤ ウケハシゲ、ネタマシ顔のように、語幹の用法だけのものは数えていない。

⑥ 第二章第二節四

⑦ 澤瀉久孝著 卷七（一九六〇・九 中央公論社）

⑧ 「萬葉集抜書」「調使首見屍作歌一首」（一九八〇・五 岩波書店）

⑨ 「語構成の研究」第二篇第三章第二節（一九六六・三 角川書店）

⑩ 山口氏は前掲書・同節（第二章第二節四）の中でウルハシについて、

ウルハシ（麗）は、

関八河辺（万一一、二七五四）

のような河川名の存在から見て、情態言ウルハシの付いたものと解される。（中略）ウルはウルフ（潤）・ウルホス（潤）などのウル、ハは情態言を作る接尾辞ではなからうか。

と述べておられる。山口氏の挙げられた例は、

朝柏関八河辺の小竹の芽の偲ひて寝れば夢に見えけり

で、「関八」はウルハともウルヤとも訓むことができると思われる。「萬葉集注釋」の訓訳を見ると、「八」が「ヤ」と訓まれる例の多いこと（巻第一一、二五六一）や、「関」が訓読すべき文字であること（巻第七、一一二四）から「関八」をウルヤと訓むべきとされている。また、

秋柏潤和川辺の篠のめ人にはしのべ君にあへなく（万二四七八）

の「潤和」はウルワと訓むべきものかと思われ、差し示す内答は「うるほっている川（河）」で二七五四の歌と同じと見て良いだろう。右のウルヤおよびウルフのウルとウルフ・ウルハシのウルとは同根と思われるが、右の二例から「ウルハ」という情態言を想定することには無理があるように思われる。

むしろ、ウルハシは動詞ウルフと関係付けるべきではないだろうか。

嗟 且我佐可三反上鮮盛之兒（新撰字鏡）  
阿佐也可尔反字留和志

右の例を見ると、「鮮盛之兒」をさして「字留和志」と訓んでいる。「鮮盛」すなわち「あざやか」にして意気軒昂と盛んな様子」をしている貌が、言いかえると、快活で力の満ちあふれた、あるいは潤ったたいへん見目の良い貌がウルハシであるならば、動詞ウルフとの連関も考え得るのではないかと思ふ。

⑪ 万葉集卷十四（三四〇七）に「麻伎良波之」の語形が見えるが、意味的に動詞マガルとの連関は考えにくく、東歌でもあることから、この用例のマガラハシは除くべきかと思われ

る。

⑫ 注⑥に同じ。

⑬ 前掲書第二篇第三章第四節

⑭ シ②はシク活用形容詞を構成するもの、シ①はク活用形容詞を構成するものとされている。

⑮ 前掲書第一篇第三章第二節

⑯ 国語国文二八一四（一九五九・四）

⑰ ツ・ヘタマシ——ツメタシは、b・mの子音交替と見てさしつかえないだろう。

⑱ 「日本古典文学大辞典」（一九八四・一〇 岩波書店）の「枕草子」（石田穰氏担当）の項では、この第二類本について、「本文は完備しているが、界本と接合した結果の校訂、さらに部分的に独自の校訂の形跡があり三卷本としては不純である。」と述べられており、やはり「アラクマシ」を取り挙げるには問題がある。

⑲ 一九七七・一一 風間書房

⑳ 前掲書第一篇第三章第二節